

ジョヴァンニ・デル・ビオンドの 《玉座の聖ゼノビウス》をめぐる一考察

—共和制フィレンツェの守護者としての聖人像—

金原 由紀子

Giovanni del Biondo's *St. Zenobius Enthroned*

—The image of the Saint as a defender of the Republic of Florence—

KANEHARA, Yukiko

Abstract

St. Zenobius, a Florentine Bishop in the early Christian era, was venerated as a saint in the Cathedral of Florence from the eleventh century, and was depicted between the mid-thirteenth and sixteenth century. His ties with the city were represented through paintings that show the saint with Florentine symbols such as lilies and lions (Marzocco), from 1330 onward. In Giovanni del Biondo's *St. Zenobius Enthroned*, painted in ca. 1380, we can see the saint, wearing a coat of lily, with eight personifications of virtue and three of vice. This combination of a saint and the personifications of virtue and vice is unusual. Comparing this with *The Allegory of Good Government* and *The Allegory of Bad Government*, which were executed by Ambrogio Lorenzetti in 1338-1339 in the Town Hall in Siena, I consider this panel to have a double significance — an ideal bishop and the defender of the Republic of Florence — and analyze the social background of this period.

要旨

初期キリスト教時代のフィレンツェ司教だった聖ゼノビウスは、同都市の大聖堂で11世紀から篤く信仰され、13世紀半ばから16世紀初頭に繰り返し造形化された。1330年代以降には、聖ゼノビウス像をフィレンツェのシンボルであるユリやライオン（マルゾッコ）と共に表わすことで都市との結びつきが強調されたが、1380年頃にジョヴァンニ・デル・ビオンドが制作した板絵「玉座の聖ゼノビウス」には、聖人とユリの紋章に加えて8人の

美德の擬人像と3人の悪徳の擬人像が描き込まれている。聖人像と美德と悪徳との組み合わせが稀有であることから、本論では、シエナ政庁に1338～39年にアンブロージョ・ロレンツェッティが制作した 善政の寓意 および 悪政の寓意 の図像と比較することにより、本作品が理想的な司教像と共和制都市国家フィレンツェの守護者のイメージを重ね合わせていることを指摘し、その時代背景について考察した。

キーワード

ジョヴァンニ・デル・ビオンド (Giovanni del Biondo)

聖ゼノビウス (St. Zenobius)

フィレンツェ司教 (Florentine bishop)

守護聖人 (patron saint)

はじめに

聖ゼノビウスは4世紀後半から5世紀初めのフィレンツェ司教で、サン・ロレンツォ聖堂を含む複数の聖堂をフィレンツェに建設し、病の治癒や死者の蘇生などの奇蹟を行なったと伝えられる証聖人である。イタリアのトスカーナ地方では、サン・ジミニャーノの聖ギミニアヌスやアレツォの聖ドナトゥスなど多くの司教聖人が他にも知られるが、ゼノビウスはその中で最も繰り返し造形化された。聖ゼノビウス崇敬の網羅的なモノグラフを2005年に刊行したA. チャンデッラによれば、同聖人が盛んに造形化された13世紀半ばから16世紀初頭の作例は写本挿絵を含めると130点以上が現存する⁽¹⁾。

一般に、司教聖人を造形化する際にはミトラ（司教冠）と大外衣を着用し、司教杖と書物を手に持つ姿で表わされる⁽²⁾。聖ゼノビウスの場合にはそれに加えて、フィレンツェのシンボルであるユリの紋章やマルゾッコと呼ばれるライオンの像や 受胎告知 のイメージが表わされ、聖ゼノビウスと一目で識別できる図像が1330年代に確立する⁽³⁾。これはすなわち、14世紀には聖ゼノビウスとフィレンツェとの結びつきが強調され、都市の守護聖人としての側面が明確に表現されるようになったことを意味する。都市の守護聖人であることを示す一般的なアトリビュートとしては、1390～1400年頃のタッデオ・ディ・バルトロの 聖ギミニアヌス祭壇画（図1）に見られるような都市をかたどる小さな模型がよく知られるが、聖ゼノビウスの場合にはフィレンツェ共和国との絆を直接的に示すフィレンツェの白地に赤いユリの紋章、白地に赤十字のポポロ・フィオレンティーノの紋章、共和国のシンボルであるマルゾッコと共に表わされる場合もあった（図2）。

聖ゼノビウスが司教聖人としては異例なまでに政治的に表象されたのは、後述するように、フィレンツェで没したわずか2人の初期キリスト教時代の聖人のうちの一人であったこと、共和制都市国家の時代のフィレンツェが同聖人を都市の守護聖人の一人として重視したこと、フィレンツェが真正な聖遺物を保有した唯一の守護聖人であったことが理由として挙げられよう。13世紀末から14世紀末を通じて、従来は司教が持っていた聖俗の権力をコムーネ政府が徐々に奪っていたが、その中には都市の守護聖人に対する権限が含まれていた⁽⁴⁾。トスカーナ地方の共和制

コムーネにおいては、都市の重要な聖遺物の管理の権限を政府が教会側から奪うという現象が14世紀の第2四半世紀頃から各地で見られた。例えば、フィレンツェの隣町プラートでは1346年に、武装したコムーネの役人と市民がサント・ステファノ聖堂（プラート大聖堂の前身）に押し入り、内陣の主祭壇に納められた町で最も高名な聖遺物「聖帯」を持ち出して、聖堂西側に新たに設けた祭壇に移し、その管理に介入するという事件が起きている⁽⁵⁾。これは、聖遺物に集まる莫大な寄進や奉納が司教に独占されるのを防ぎ、聖遺物の展覧の権限を政治利用することを狙っていた。フィレンツェの聖ゼノピウスの場合も、13世紀半ば頃からコムーネ政府が徐々に管理に介入し、同聖人の位置づけをフィレンツェの初期キリスト教時代の司教聖人から共和国の守護者へと変質させていったと考えられるのである。こうした観点からの聖ゼノピウス研究は歴史学の分野においてはA.ベンヴェヌーティ⁽⁶⁾により近年盛んに行なわれており、また同聖人の聖遺物と典礼に関する研究もA.チャンデッラ⁽⁷⁾、G.レオンチーニ⁽⁸⁾、A.ピッキ⁽⁹⁾、B.ウィルソン⁽¹⁰⁾らによって進められている。だが、美術史研究においては聖ゼノピウス崇敬の様相と図像は未だ包括的には論じられておらず、E.コールマン⁽¹¹⁾、M.ヘインズ⁽¹²⁾、T.ヴァードン⁽¹³⁾、M.C.ミラー⁽¹⁴⁾が個別の作例についての検討を行なったに過ぎない。

近年のこうした優れた歴史分野の研究をふまえて、論者は13世紀半ばから15世紀末までのフィレンツェにおける聖ゼノピウスの図像の展開について包括的な検討を進めているところだが、本論では、フィレンツェの古き聖人である聖ゼノピウスに対する管理においてコムーネ政府が重要な役割を担うようになったと推測される14世紀後半に注目し、この時期におそらくは大聖堂のために制作されたジョヴァンニ・デル・ピオンドの板絵 玉座の聖ゼノピウス（図8）の図像的分析を試み、その歴史的背景と役割について考察を行なう。そして、聖人像に美德と悪徳の擬人像を組み合わせた特徴的な図像が、フィレンツェ教会の理想的司教と共和制都市国家フィレンツェの守護者を表しているとの解釈を提示し、検証していく。

1. フィレンツェにおける聖ゼノピウス崇敬

聖ゼノピウスは、フィレンツェで最も重要な聖人として11世紀から信仰を集めるようになった。11世紀にフィレンツェ教会の典礼暦に聖ゼノピウスの祝日が設けられ、さらに同聖人の信仰を普及させるためにロレンツォ・ディ・アマルフイにより伝記が執筆された⁽¹⁵⁾。この最古の聖ゼノピウス伝は簡潔で短く、後に繰り返し造形化される有名な「楡の奇蹟」についての記述も控えめである。先に述べたように、聖ゼノピウスはフィレンツェが聖遺物を保有する初期キリスト教時代の2人の聖人のうちの一人であった。もう一方は、フィレンツェ市外の丘の上に聳えるサン・ミニアート・アル・モンテ聖堂に聖遺物が祀られた聖ミニアスである。聖ミニアスは、デキウス帝によるフィレンツェのキリスト教徒の迫害により250年頃に斬首された兵士だった。斬首された聖ミニアスが自らの首を持って登ったとされる丘の上に、313年のミラノ勅令の後に小さな礼拝堂が建設されたという⁽¹⁶⁾。8世紀にはカール大帝より寄進を受けたがまもなく荒廃し、11世紀にはフィレンツェ司教イルデブランドにより再興されて現在の姿になった⁽¹⁷⁾。聖ミニアスはフィレンツェで最初の殉教者であり、殉教地にそのまま聖遺物が保管されているという由緒正しき聖人でありながら、その崇敬は聖ゼノピウスに比べて決して盛んだったとはいえない。聖ミ

ニアスが伝承によればアルメニア人だったこと、その崇敬が司教イルデブランドという神聖ローマ皇帝と親しい人物により再興されたことから、コムーネは同聖堂の管理の権限を13世紀末までには掌握しながらも、聖ミニアスを都市の主要な守護者に据えようとは考えなかったのであろう。

それに対し聖ゼノビウスは、フィレンツェの古い貴族の家系の出の人物であったとされる⁽¹⁸⁾。その上、聖ゼノビウスはフィレンツェ旧市街の各所に、奇蹟を行なったことを伝える多くの痕跡を残しており、市民にとってはきわめて身近な存在であった。サン・ジョヴァンニ洗礼堂の北側には、「榆の奇蹟」が起きたことを記念する円柱(図3)が立っており、アルビツィ通りには聖ゼノビウスがガリア人女性巡礼者の息子を奇蹟により蘇生させたことを記念する石⁽¹⁹⁾がかつて存在し、クローチェ・アル・トレピオ広場には聖ゼノビウスとミラノ司教聖アンブロシウスが十字架を建てたとされる場所に今も14世紀の円柱が聳えている。また、聖ゼノビウスは大聖堂の内陣のクリプタという至聖所に聖遺物が祀られていた。伝承によれば聖ゼノビウスは417年頃に没すると、当時は市壁外に位置していたサン・ロレンツォ聖堂に埋葬されたが、後任の司教アンドレアが429年にその遺骸を市壁内のサンタ・レパラータ聖堂に移葬したという。まさにこの移葬の最中に、聖ゼノビウスの奇蹟としては最も有名な「榆の奇蹟」が起きているのである。15世紀末にクレメンテ・マツァが編纂した聖ゼノビウス伝によれば、429年1月26日に聖人の棺をかついだ司教たちの行列がサン・ロレンツォ聖堂を出発し、サン・ジョヴァンニ洗礼堂の前を通過してサンタ・レパラータ聖堂に向かおうとしていたところ、聖なる棺をひと目見ようと群衆が殺到した。司教らは押されて倒れかかったが、洗礼堂の北扉の近くに立っていた榆の枯れ木にぶつかり、なんとか踏みとどまった。すると、この枯れた榆の木に棺が触れた瞬間に緑の葉が芽吹き、花が咲き乱れて甘い香りを放ったという⁽²⁰⁾。史料と考古学的調査からは⁽²¹⁾、移葬が10世紀以降に行なわれたことが判明している。都市にとって重要な聖人が大聖堂に移葬されたことにより、11世紀から崇敬が盛んになったと考えると辻褄が合う。

その後、12世紀初頭にフィレンツェにコムーネ政府が誕生すると、一領主の如くに広い地所を所有して世俗的権力を行使していた司教との間で衝突を繰り返すようになるが、14世紀末までにはコムーネ政府が司教の力を概ね上回るようになっていた⁽²²⁾。コムーネ政府が教会側から篡奪した権限の中には、フィレンツェの主要な聖堂の管理と都市の守護聖人の管理があった。13世紀までには、カリマラ(毛織物商)組合の運営するサン・ジョヴァンニ教会財産管理局がサン・ジョヴァンニ洗礼堂とサン・ミニアート・アル・モンテ聖堂の建物や調度を、羊毛業組合の運営する大聖堂財産管理局がサンタ・レパラータ大聖堂を管理するようになっていた⁽²³⁾。また、伝統的にフィレンツェの守護聖人とされていたのは洗礼者ヨハネ、聖ゼノビウス、聖レパラータ(旧大聖堂の名義聖人titulus)であったが、1342年にはアテネ公の追放により共和制を回復した記念日の聖人である聖アンナを、1364年にはフィレンツェ軍がピサとの戦争に勝利した日の聖人である聖ウィクトルをコムーネ政府が守護聖人に加えている。

このように、14世紀にはコムーネが都市の守護聖人を決定するようになっていたのだが、干ばつや飢饉や疫病の流行の折にコムーネが助力を求めたのは、こうした記念日をもとに定めた守護聖人ではなく、フィレンツェが真正な聖遺物を保有する聖人だった。例えば、1354年の干ばつの折にはインブルネータの聖母のイコン⁽²⁴⁾、聖ゼノビウスの頭部(図5)、聖ピリポの腕⁽²⁵⁾の聖

遺物を掲げて雨乞いの行列を実施している。また、1352年のナポリ国王ルイの戴冠式にフィレンツェのコムーネが外交使節を派遣した際には、ナポリ領内の町テアーノで発見された聖レパラータの遺体の一部を分与して欲しいと願い出て、フィレンツェ大聖堂の名義聖人の聖遺物の入手に努めていた。聖ゼノピウスはフィレンツェ人であり、聖遺物が大聖堂に祀られ、都市の守護聖人であったことから、コムーネにとっても市民にとっても身近で「効力のある」聖人としてとりわけ重視されていたに違いない。

2. ジョヴァンニ・デル・ピオンドの 玉座の聖ゼノピウス

フィレンツェのサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の北側廊西側の第1の柱には、大聖堂のために制作されたと考えられる板絵 玉座の聖ゼノピウス (図8) が掛けられている。注文にまつわる記録は残っていないが、その様式から1380年頃のジョヴァンニ・デル・ピオンドに帰属されてきた⁽²⁶⁾。それ以前に描かれた聖ゼノピウス像は、所謂「ピガッロの画家」による13世紀半ばの 聖ゼノピウス祭壇前面飾り を除き、フィレンツェの他の守護聖人と共に祭壇画のサイド・パネルに表わされた作例、あるいはメイン・パネルの玉座の聖母子の周囲に複数の聖人と共に配置された作例しか現存しない。しかしながら、ここで取り上げる板絵は聖ゼノピウスが単独で表わされ、8つの美德と2つの悪徳の擬人像と組み合わせられている点が注目される。

本作品はゴシック様式の枠をもち、パネル最上部のメダイオンにはアルファとオメガと記した書を左手に持ち、右手で祝福するキリストが描かれている。主画面には、玉座の聖ゼノピウスが正面観で描かれており、ケルビムの模様の付いたミトラ、白地に金の模様の入った豪華な大外衣を身につけ、キリスト磔刑と聖母とヨハネが表わされた四葉型の留め金を胸元に付けている(図9)。左手には赤い書物を、右手には司教杖を持ち、杖の渦巻きの部分はフィレンツェのユリの紋章の形になっている(図10)。玉座の手前の左右には、聖ゼノピウスの助祭であった聖エウゲニウスが書物を持つ姿で、副助祭だった聖クレスケンティウスが香炉を持つ姿で描かれている。3人の下にはゴシック体の銘文「S^CS EVGENIVS, S.ZENOBIVS EPS FLORETINVS, S. CRESCENZIVS (聖エウゲニウス、フィレンツェ司教聖ゼノピウス、聖クレスケンティウス)」が読み取れる。

主画面下のプレデッラには2つの物語場面が描かれ、共に最古の聖ゼノピウス伝にも語られた有名な奇蹟のエピソードを表わしている。左側の ガリア人女性巡礼者の息子の蘇生 (図13) では、簡素な建物を背景に、中央に蘇生した少年が上半身を起こして路上に座っており、左側にはひざまずいて右手で祝福する聖ゼノピウス、右側には黒いマントを着たガリア人女性巡礼者がひざまずいて祈る姿を描いている。左右の背後には14世紀の装束に身を包んだフィレンツェ市民が描きこまれている。右側の 榎の木の子 (図14) では、ぶどうの実と葉の模様入りの赤い織物に覆われた聖ゼノピウスの棺をかつぐ聖職者たちの行列が描かれ、その背後に緑の葉を茂らせた榎の木が描かれている。プレデッラの上部の枠にはローマン体のラテン語銘文「SANCTE PRAESUL PER TE FLORENTIA FLORET (聖なる司教、汝によりフィレンツェは繁栄している)」が記されている。枠は1842年の修復時に作り直されているが、この銘文がオリジナルの枠に由来

する銘文ならば、枯れた榆の木の繁茂がフィレンツェの繁栄と結びつけられ、都市の守護者としての聖ゼノビウスの役割を強調するものである。

本作品の最も特異な点は、聖人像に美德と悪徳の擬人像が組み合わされていることだろう。大外衣の縁飾りの部分には、留め金の上の左右に、使徒信条と似た一節を記した巻紙を掲げる半身の使徒ペテロと使徒ヨハネが描かれている(図9)。留め金の下には「信仰」の擬人像、右には「希望」の擬人像、その下の左には「正義」、右には「剛毅」、さらに下の左には「節制」、右には「慎重」の擬人像が描き込まれていることがアトリビュートから判別できる。そして、最下部には巻紙を掲げる使徒が表わされている。司教の足下の左では角を持つ男性像、右では少年の血を吸う男性像が司教により踏まれているが、それぞれ肩から腕にかけて記された銘文により、前者は「SUPERBIA(傲慢)」、後者は「CRUELITAS(残酷)」の擬人像であることが判る(図11)。また、聖ゼノビウスの背後には天幕を開く女性の擬人像が描かれており、月桂冠をかぶる左の擬人像の衣には「HUMILITAS(謙譲)」、頭に赤い炎を載せた右の擬人像の衣には「CARITAS(慈愛)」と記されている。ここで表わされた8つの美德は、3つの対神徳と4つの枢要徳に「謙譲」を加えたものである。

ジョヴァンニ・デル・ピオンドは、1375年頃にフィレンツェのオルサンミケーレ聖堂のために制作した福音書記者ヨハネの板絵(図6)においても聖人の足下に「傲慢」、「貪欲」、「虚栄」の擬人像を踏み敷く表現を導入していた(図7)。2010年に刊行されたアカデミア美術館の絵画カタログでは、ここでの悪徳の擬人像は、新約聖書「ヨハネの手紙1」の2章13~16節の「あなたがたが悪い者に打ち勝ったからである。(中略)なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは御父から出ないで、世から出るからです」という記述に対応しており、これらの悪徳に打ち勝つ福音書記者ヨハネを表わしていると指摘している⁽²⁷⁾。一方、玉座の聖ゼノビウス の美德と悪徳については、オフナーによれば、聖ゼノビウスは「傲慢」と「残酷」の征服者として描かれており、さらに悪徳に対する美德の勝利が表現されているという⁽²⁸⁾。また、角の生えた兜をかぶる怪物として描かれた「傲慢」のイメージは、アンブロジー・ロレンツェッティが1338~39年にシエナの政庁の「ノーヴェの間」に描いた壁画 悪政の寓意(図16)と関連があるとも指摘している。オフナーはロレンツェッティの 悪政の寓意 を引き合いに出しながらも、美德の擬人像については何も言及していないのだが、聖人像と美德と悪徳の擬人像を組み合わせて表わした作例が稀有なことを考慮に入れるならば、ジョヴァンニ・デル・ピオンドは美德の擬人像についてもロレンツェッティの作例を参考にした可能性があるとする論者は考える。

ロレンツェッティはシエナ政庁の壁画 善政の寓意 (図15)において、共和制都市国家シエナの擬人像の頭上に「信仰」、「希望」、「慈愛」という3つの対神徳の擬人像を表わし、シエナの擬人像の両脇には6つの美德の擬人像を描いた⁽²⁹⁾。この6つは、プラトンの『国家』で理想的都市国家の市民に求められる美德として定式化された「剛毅」、「賢明」、「節制」、「正義」の4つの枢要徳に「平和」と「寛大」を加えたものである。枢要徳は初期キリスト教会の教父たちにより、聖体拝領によって授かる恩恵としてキリスト教の文脈に取り入れられたが、ここでは共和制都市国家のシエナで善政を行なうために必要な美德として表わされている。一方、ジョヴァンニ・デル・ピオンドの 玉座の聖ゼノビウス には8つの美德が表わされ、3つの対神徳と4つの枢要

徳に加えて、「謙譲」の擬人像が聖人の背後に描かれている。3つの対神徳は、「慈愛」が聖人の背後に、「信仰」と「希望」が大外衣の縁の最上部にと、聖人像の胸よりも高い位置に描かれている。これらは神へと至る重要な美徳であることから、善政の寓意においても本作品においても画面上部に配置されているのだろう。そして、善政の寓意においてシエナの擬人像と並置されていた枢要徳の擬人像は、玉座の聖ゼノピウスにおいては、大外衣の縁の留め金より下の位置に描かれている。また、聖人の背後に描かれた「謙譲」は、聖母マリアと結びつけられることの多い美徳であるが、足下に踏みつけられる「傲慢」の対極にある徳であることから、司教に求められる資質を意味するとの解釈も可能だろう。

このように見てみると、これら2作品は一見全く別の主題を異なる文脈で表現しているように思われるが、実は共通点がきわめて多い。世俗建築内に描かれた善政の寓意では、白い髭をたくわえた老人として表象された共和制都市国家シエナの擬人像が玉座に座する姿が正面観で表わされている。施政者が備えるべき対神徳は頭上に表わされ、理想的な共和制都市国家を築くために必要な枢要徳は並置されている。一方、玉座の聖ゼノピウスはフィレンツェ大聖堂のために制作されたと考えられる宗教画だが、聖人の司教杖にはフィレンツェのシンボルであるユリが表わされており、フィレンツェの守護聖人としての側面が明確に強調されている。そして、聖人はシエナの擬人像と同様に正面観で表わされ、対神徳と枢要徳が上から下へと描き込まれている。ジョヴァンニ・デル・ピオンドがロレンツェッティの壁画に着想を得ているならば、ここでの聖ゼノピウスには単なる都市の守護聖人ではなく、共和制都市国家フィレンツェの有力な守護者としてのイメージが表象されているのではないかと考えられるのである。本作品は注文者も用途も知られていないが、1296年に再建工事が始まった大聖堂の管理が世俗の組合の主導で行なわれていたことを考慮に入れるならば、コムーネがここでの聖ゼノピウスに共和制都市国家の統治権の正統性の源としての意味を込めていたとしても不自然ではない。そして、聖ゼノピウス像に共和制都市国家の守護者という意味が込められているならば、聖人が足下に踏みつける「傲慢」と「残酷」は、当時のコムーネ政府が敵と見なしていた豪族 *magnati* の表象と解釈することも可能なのではないだろうか⁽³⁰⁾。1380年代にこうした政治的含意をもつ司教聖人像が表わされる必然性を明らかにするために、次章で1330年代から1380年代のフィレンツェのコムーネ政府と司教を取り巻く状況を検討する。

3.1330年代から80年代のフィレンツェ

1330～80年代は、フィレンツェ大聖堂の聖遺物の管理に対するコムーネ政府の介入が急速に強まった時期だった。1331年1月に聖ゼノピウスの聖遺物の確認が初めて行なわれた際は、フィレンツェ司教、ピサ大司教、フィエーゾレ司教、スポレート司教、フィレンツェ大聖堂の聖堂参事会員、その他の聖職者たちの立ち会いの下で、サンタ・レパラータ大聖堂のクリプタの聖ゼノピウスに捧げられた祭壇の下が調査され、同聖人の聖遺物が確認された⁽³¹⁾。フィレンツェの有力な家柄のメンバーが司教に即位することを妨げる都市条例をコムーネ政府が1320年代に制定し、司教の権限をますます制限していったことから、司教と大聖堂聖堂参事会の威信を回復する目的で、この聖遺物の確認が教会関係者のみによって実施されたとA.ベンヴェヌーティは指摘し

ている⁽³²⁾。聖ゼノビウス像にコリヤマルゾッコが付け加えられるようになったのは、この少し後の1330年代半ばのことであった。

そして、フィレンツェで暴政を行なったアテネ公ゴージェ・ド・ブリエヌが1343年に追放された後に共和制を回復すると、コムーネ政府はアテネ公が追放された日の聖人である聖アンナを都市の守護聖人に加え、その一方で大聖堂の聖遺物に対する介入を強めた。先に述べたように、1352年にはフィレンツェのコムーネ政府がナポリ国王ルイに聖レパラータの腕の聖遺物を分与してくれるようお願い出て、許可されている。翌1353年には、フィレンツェの大聖堂が聖レパラータという無名の聖女に献堂された理由を調べるために、コムーネ政府が古文書の調査を実施している。そして、1364年7月28日にフィレンツェ軍がカッシーナでピサ軍を破ると、その日が聖ウィクトルの祝日であったことからこの聖人を都市の守護聖人に加え、建設中のサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の内陣に礼拝堂を設けることを決めた。このように14世紀後半に入ると、都市の守護聖人や聖遺物に関する主導権が教会側からコムーネ政府に移ったことがうかがえるのである。

さらに1375年には、所謂「聖ゼノビウスの円柱」(図3)に銘文と鍛鉄の装飾が取付けられた。この円柱は「楡の奇蹟」を記念するために建てられたもので、1333年のアルノ川の洪水で古い円柱が流された後、サン・ジョヴァンニ教会財産管理局の命令で翌1334年に再建され、1339年には円柱の頂部に石の十字架が設置された。1375年に柱身の中程に刻まれたラテン語銘文には、聖ゼノビウスの移葬の際に起きた楡の木の奇蹟を記念してこの場所に円柱が建てられたという内容が記されている⁽³³⁾。同年に円柱頂部の十字架の下に取付けられたミリオーレ・ディ・ニコロ・スプロナイオによる鍛鉄の装飾(図4)は楡の葉をかたどっているが、楡の木は古くから会合のシンボルであり、コムーネの起源を示すとされる⁽³⁴⁾。これは、コムーネの会合が、政庁や教会の中で行なわれるようになる以前は楡の木陰でしばしば行なわれていたからである。従って、1375年にサン・ジョヴァンニ教会財産管理局の管理下でこの円柱に鍛鉄の楡の葉の装飾が取付けられたのは、単に聖ゼノビウスの奇蹟を思い出させるためだけでなく、フィレンツェの共和制都市国家の起源が古い時代にまで遡るということを強調しようとするコムーネ政府の意図が込められているのである。

また、フィレンツェのコムーネ政府と司教の関係の変化について考察する上では、フィレンツェ司教の入市式 *adventus* の儀式の変遷が参考になる⁽³⁵⁾。フィレンツェでは13世紀後半から1583年まで、新しく叙任された司教がローマから来て初めて同市に入る時に入市式が行なわれていた⁽³⁶⁾。13世紀末にはフィレンツェの貴族階級出身の司教が司教区の財産を横領するなどのスキャンダルが頻発したことから、コムーネはフィレンツェの豪族が司教になることを禁止し、さらにはフィレンツェ人が司教になることも禁じた⁽³⁷⁾。こうした状況の中で、ローマで教皇から祝聖を受けた司教が初めてフィレンツェに入る際に、2日間にわたる盛大な入市式を行なうようになったのである。

新しく叙任された司教は、入市式の前日にフィレンツェ近郊のチェルトーザの修道院に宿泊してコムーネの役人らと会合をもった⁽³⁸⁾。入市式第1日目、司教はフィレンツェ最南部にあるサン・ピエトロ・ガットリーノ門でコムーネの高官や大聖堂の聖堂参事会員や聖職者や市民に迎えられ、空位期間に司教区の管理を慣例により代行していたヴィスドミニ家のメンバーを随員とし

て連れながらサン・ピエル・マッジョーレ聖堂へ向かった。6人の随員は司教の頭に錦の天蓋を掲げ、その棹には当時のローマ教皇、新しい司教、コムーネ、ポポロ・フィオレンティーノ、グェルフィ党、ヴィストミニ家の紋章のついた旗が飾られたという⁽³⁹⁾。同聖堂ではベテロに捧げられた祭壇で祈りを捧げ、それからサン・ピエル・マッジョーレ女子修道院を訪れた。修道院では司教が女子修道院長に金の指輪を贈る「結婚の儀式」が執り行なわれ、司教はそのまま修道院に宿泊した。第2日目は、麻布が敷かれたアルビツィ通りを司教が裸足で歩き、聖ゼノピウスがガリア人女性巡礼者の息子を奇蹟により蘇生したことを記念する石のあった場所に立ち寄ってから、プロコンソロ通りを経て大聖堂へと向かった。大聖堂では聖ゼノピウスの祭壇で祈り、それからサン・ジョヴァンニ洗礼堂で最初のミサを挙げた。次に司教館へ入り、司教の空位の間の管理簿と司教館の鍵をヴィストミニ家の者から受け取り、彼らから忠誠の宣誓を受けた。

M.C.ミラーによれば、この入市式は司教とコムーネが事前の協議で合意に至ったことを市民に知らしめ、しばしば外国人が就いた司教に「結婚の儀式」を通じてフィレンツェ市民の忠実な伴侶となるよう誓約を求め、聖ゼノピウスに縁のある場所を裸足で巡礼することで初期キリスト教時代のフィレンツェ司教に対する敬意を表明するよう求めることを目的としていた⁽⁴⁰⁾。つまり、地元のコムーネ政府と司教の間の複雑で曖昧な権力関係を、可視化する儀式であったといえる。美德を備え、数々の奇蹟を働いたとされる聖ゼノピウスは、新任のフィレンツェ司教に理想的な模範としても示されたことだろう。ジョヴァンニ・デル・ピオンドの 玉座の聖ゼノピウス が、新任の司教とフィレンツェ市民に司教の理想を寓意的に示して見せる役割を果たしていたに違いない。

玉座の聖ゼノピウス が描かれてまもなくの1384年には、入市式の一部が改変された。それまではコムーネの高官たちはサン・ピエトロ・ガットリーノ門で新しい司教を迎えていたが、1384年以降は儀式の第2日目に政庁の階段の上から司教を迎える儀式を行うよう改められたのである。これは司教の入市式において、コムーネの重要性が相対的に高まったことを意味すると思われる。実際、その2年後の1386年、儀式の詳細な役割分担をめぐって大聖堂の聖堂参事会とヴィストミニ家とサン・ピエル・マッジョーレ聖堂の司祭の間で激しい争いが起きると、コムーネが4人の俗人の調査委員を任命して調停に乗り出し、儀式における役割分担を明確に決めさせている。1380年代のコムーネ政府はグェルフィ党が復権して政権を構成していたものの、ポポロによる陰謀が発覚したり追放されていた貴族が帰還したりと、やや不安定な情勢下に置かれていた。こうした中で、当時のコムーネ政府は都市の守護聖人と聖遺物に統治権の正統性の裏付けを求め、そのために教会から主導権を奪ってそれらの管理に介入し、聖ゼノピウスを都市内の階級闘争を超えた精神的なよりどころと位置づける必要があったと推測できる。こうした1370～80年代のフィレンツェを取り巻く状況を考えると、ジョヴァンニ・デル・ピオンドの 玉座の聖ゼノピウス において司教聖人と美德の擬人像を組み合わせることで理想的司教のイメージを、悪徳を征服する図像を挿入することで共和制都市国家の有力な守護者としてのイメージを提示する必然性がコムーネ側にはあったといえる。そして、フィレンツェ教会の理想的な司教聖人のイメージを示すことで、しばしば外国人が即位したフィレンツェ司教に、美德をもって司教区を治めるようメッセージを送り続けたのではないだろうか。

おわりに

北部・中部イタリアの共和制都市国家では、裕福な中産階級が封建貴族を排除してコムーネ政府を構成するようになると、その統治の正統性を聖人に求める傾向が見られた。君主制の都市国家では、神聖ローマ皇帝から貴族の爵位を得た君主はその正統性がローマ皇帝に由来すると主張することができたが⁽⁴¹⁾、中産階級の人々が政府を組織した共和制都市国家では神や聖人を後盾にするしかなかったためである。コムーネ政府の統治が安定しない時期には、一国の中に皇帝の法とコムーネの都市条例が併存し、後者が遵守されないことも多かったが、そうした場合は法の根拠となる権威を神と守護聖人に求めるしかなかった。このような状況を裏付ける美術作品として、シエナ政庁の大評議会の中の壁面にシモーネ・マルティーニが1315年に制作した 荘厳の聖母(マエスタ) がよく知られる。ここではシエナの守護聖人である聖母の膝の上に立つイエスが持つ巻紙に「Diligite iustitiam qui iudicatis terram(地を治める者よ、正義を愛せ)」とラテン語で記されているが、これはこの広間に参じた評議員に対して正義をもって政治を行なうよう戒めると同時に、イエス自身がシエナの都市条例の根拠であることを示していると考えられるのである。これは政庁という世俗建築内に描かれた壁画の事例であるが、こうした政治的意味をもった作品が教会内に制作される場合もあった。例えば、プラート大聖堂の主要礼拝堂には1452～65年にフィリッポ・リッピによりプラートの守護聖人だった洗礼者ヨハネと聖ステファノの伝記を主題とする壁画が制作され、ステンドグラスの最上段には、プラートで最も重要な守護聖人として崇敬された聖母マリアの主題が表わされた⁽⁴²⁾。同礼拝堂のパトロンとしての権利を所有し、この3人の守護聖人を主題とした装飾を注文したのは、プラートの地元政府だったのである。ステンドグラスの縁にはプラートのコムーネの紋章が散りばめられている。また、A.ヴォーシェは北部・中部イタリアでは商人など中産階級出身のローカルな聖人がしばしば篤く崇敬されたことを、ヨーロッパの他の地域には見られない特殊な現象として注目している⁽⁴³⁾。本論で検討したジョヴァンニ・デル・ピオンドの 玉座の聖ゼノビウス のようなローカルな聖人崇敬に関わる美術作品を分析する際には、このように共和制都市国家という文脈の中に位置づけてみるのがよりの確な作品解釈を行なう上できわめて有効だと論者は考える。

(1) A. Ciandella, *San Zanobi. Vita, reliquie, culto, iconografia*, Firenze 2005, pp. 422-484.

(2) 聖ゼノビウスの図像については、G. Kaftal, *Iconography of the Saints in Tuscan Painting*, Firenze 2003(1986), pp. 1035-1044.

(3) フィレンツェ大聖堂付属美術館が所蔵する1334/5年のベルナルド・ダッディの追隨者による祭壇画 聖母と聖ゼノビウスとアレクサンドリアの聖カタリナ では、聖ゼノビウスの司教杖の渦巻きにマルゾッコが描かれている。また、ウフィツィ美術館が所蔵する、1336～42年頃にベルナルド・ダッディがフィレンツェ大聖堂のために制作した主祭壇画のいわゆる サン・パンクラツィオ多翼祭壇画 では、サイド・パネルの聖ゼノビウスの司教杖の渦巻きに受胎告知が表わされている。受胎告知の祝日である3月25日はフィレンツェ暦の元旦だったことから、この主題は同都市では馴染み深かった。これらの作例

については別の機会に検討したい。

- (4) 都市の守護聖人については主に以下の文献を参照した。A. Vauchez, *Patronage des Saints et religion Civique dans l'Italie Communale a la fin du Moyen Age*, in id., *I Laici nel Medioevo: Pratiche ed Esperienze Religiose*, Milano 1989, pp. 187-206; H. C. Peyer, *Città e santi patroni nell'Italia medievale*, Firenze 1998; D. Webb, *Patrons and Defenders; The Saints in the Italian City-states*, London & New York 1996; A. Thompson, *Cities of God: The Religion of the Italian Communes 1125-1325*, Pennsylvania 2005.
- (5) 金原由紀子『プラートの美術と聖帯崇拜 都市の象徴としての聖遺物』、中央公論美術出版、2005年、p.56.
- (6) A. Benvenuti, *Un momento del Concilio di Firenze: la traslazione delle reliquie di san Zanobi*, in *Firenze ed il Concilio del 1439*, a cura di P. Viti, convegno di studi, vol.I, Firenze 1994, pp. 191-220; id., *I Culti Patronali tra Memoria Ecclesiastica e Costruzione dell'Identità Civica: L'Esempio di Firenze*, in *Le Religion Civique à l'Époque Médiévale et Moderne (Chrétienté et Islam)*, sous la direction d'A. Vauchez, Rome 1995, pp. 99-118; id., *San Zanobi: memoria episcopale, tradizioni civiche e dignità familiari*, in *Pastori di Popolo: storie e leggende di vescovi e di città nell'Italia Medievale*, Firenze 1988, pp. 127-176.
- (7) A. Ciandella, *op.cit.*, 2005. また、フィレンツェ大聖堂と洗礼堂に残る聖遺物の歴史と崇敬については、A. Bicchi e A. Ciandella, *Testimonia Sanctitatis: Le reliquie e i reliquiari del Duomo e del Battistero di Firenze*, Firenze 1999.
- (8) G. Leoncini e A. Bicchi, *Il Culto dei Santi in Cattedrale*, in *La Cattedrale come Spazio Sacro*, II*, Atti del VII Centenario del Duomo di Firenze, a cura di T. Verdon e A. Innocenti, Firenze 2001, pp. 299-323. ただし、レオンチーニの担当部分は pp. 299-313.
- (9) 註6の文献および、註7の文献の pp. 314-323.
- (10) B. Wilson, *Music, Art and Devotion: the Cult of St. Zenobius at the Florentine Cathedral during the Early Renaissance*, in *CANTATE DOMINO : Musica nei secoli per il Duomo di Firenze*, a cura di T. Verdon e A. Innocenti, Atti del VII Centenario del Duomo di Firenze, III, Firenze 2001, pp.17-36.
- (11) E. Callmann, *Botticelli's Life of Saint Zenobius*, in "The Art Bulletin", 66(1984), n. 3, pp. 492-496.
- (12) M. Haines, *Il Principio di "Mirabilissime cose": I Mosaici per la volta della Cappella di San Zanobi in Santa Maria del Fiore*, in *La difficile eredità. Architettura a Firenze della Repubblica all'assedio*, Firenze 1994, pp. 38-55.
- (13) T. Verdon, *La Figura del Vescovo nell'Arte, La Cappella di S. Zanobi e altre opere*, in "Vivens Homo, Il Vescovo tra storia e teologia, saggi in onore del Cardinal Silvano Piovanelli", anno XI, gennaio-giugno, 2000, pp. 361-370.
- (14) 「ピガッロの画家」による 聖ゼノピウス祭壇前面飾り について、フィレンツェの司教の入市式との関連で論じた。M.C. Miller, *The Saint Zenobius Dossal by the Master of the Bigallo and the Cathedral Chapter of Florence*, in "Haskins Society Journal", 19(2007), pp. 65-81. また、同作品については、金原由紀子「ピガッロの画家の 聖ゼノピウス祭壇前面飾り」、『美術コレクションを読む』、遠山公一・金山弘昌編、慶応義塾大学出版会、2012年、pp. 37-57.
- (15) アマルフィ司教ロレンツォによる『VITA SANCTI ZENOBII EPISCOPI』のテキストは、A. Ciandella, *op.cit.*, 2005, pp. 35-40を参照。
- (16) R. Davidsohn, *Storia di Firenze*, vol. 1, Firenze 1977, pp. 54-55.
- (17) フィレンツェにおける聖ミアス崇敬とサン・ミニアート・アル・モンテ聖堂については、以下の文献を参照した。G. Dameron, *The cult of St Minias and the struggle for power in the diocese of Florence, 1011-1018*, in "Journal of medieval history", 13(1987), pp. 125-141; F. Gurrieri, L. Berti, C. Leonardi, a cura di, *La Basilica di San Miniato al Monte*, Firenze 1988; F. Pratesi, *La splendida Basilica di San Miniato a Firenze*, Firenze 1995; S. B. Montgomery, *Quia venerabile corpus redicti martyris ibi repositum: Image and Relic in the Decorative Program of San Miniato al Monte, Florence*, in *Images, Relics, and Devotional Practices in Medieval and Renaissance Italy*, eds. By S. J. Cornelison & S. B. Montgomery, Arizona 2006, pp. 7-25; F. Gurrieri, R. Manetti, a cura di, *Dieci Secoli per la Basilica di San Miniato al Monte*, Firenze 2007.
- (18) フィレンツェのジローラミ家が聖ゼノピウスの未裔だと主張し、司教の指輪の聖遺物を所有していたこ

- とが知られる。S. J. Cornelison, *A French King and a Magic Ring: The Girolami and a Relic of St. Zenobius in Renaissance Florence*, in “Renaissance Quarterly”, vol. 55(2002), pp. 434-469.
- (19) 現在は、アルビツィ通り18番地のパラッツォ・ヴァローリ＝アルトヴィーティの外壁にはめ込まれた碑板が、その奇蹟が起きた場所であることを示している。
- (20) マツァの伝記には、「楡の奇蹟」の直後にフィレンツェの人々が楡の木の葉や花をちぎって持ち帰り、最後には幹を抜いて切断し、その木材でいくつもの祭壇画と磔刑像を作ったと語られている。大聖堂付属美術館所蔵の「ピガッロの画家」の「聖ゼノビウス祭壇前面飾り」と、サン・ジョヴァンニーノ・デイ・カヴァリエリ聖堂の右側廊のニッチに掛けられた木製の磔刑像は、この楡の木から作られたと伝承されている。
- (21) G.B. Ristori, *Della venuta e del soggiorno di S. Ambrogio in Firenze*, in “Archivio storico italiano”, 5° ser., 36(1905), p. 256; F. Toker, *Excavations below the Cathedral of Florence, 1965-74*, in “Gesta”, 14(1975), pp. 17-36; R. F. Campanati, *La Cattedrale Paleocristiana di Firenze*, in T. Verdon & A. Innocenti, *op. cit.*, 2001, pp. 361-375.
- (22) コムーネ政府と司教の衝突の歴史については、D. W. Dameron, *Episcopal Power and Florentine Society 1000-1320*, London 1991. を参照した。
- (23) フィレンツェの教会財産管理局（オペラ）については、A. Grote, *L’Opera del Duomo di Firenze 1285-1370*, Firenze 2009.
- (24) インブルネータの聖母の奇蹟のイコンは、福音書記者ルカが聖母を前に描いたと伝承される。水野千依『イメージの地層：ルネサンスの図像文化における奇蹟・分身・予言』、名古屋大学出版会、2011年を参照。
- (25) 聖ピリポの腕の聖遺物は、サン・ジョヴァンニ洗礼堂に最も古くから保管された聖遺物の一つだった。A. Bicchi e A. Ciandella, *op. cit.*, 1999, p. 5.
- (26) 本作品については、G. Richa, *Notizie storiche delle chiese fiorentine divise ne’ suoi quartieri*, tomo VI, Firenze 1757, p. 123; R. Offner & K. Steinweg, *A Critical and Historical Corpus of Florentine Painting, The Fourteenth Century*, Sec. IV, Vol. V, *Giovanni del Biondo*, Part II, New York 1969, pp. 91-92, 94-95; A. Ciandella, *op. cit.*, 2005, pp. 435-436.
- (27) M. Boskovits e D. Parenti, a cura di, *Dipinti*, vol. II, *Il Tardo Trecento*, Cataloghi della Galleria dell’Accademia di Firenze, Firenze 2010, pp. 50-55.
- (28) R. Offner & K. Steinweg, *ibid.*, p. 91.
- (29) シエナ政庁のアンブロジーオ・ロレンツェッティの壁画については、E.C. Southard, *The Frescoes in Siena’s Palazzo Pubblico, 1289-1539: Studies in Imagery and Relations to other Communal Palaces in Tuscany*, New York & London 1979.
- (30) 例えば、後にマキアヴェッリは『フィレンツェ史』において、1343年にフィレンツェを追放されたアテネ公ゴーティエ・ド・ブリエンヌについて、「この公は（中略）貪欲かつ残虐であり、謁見では気難しく、対応は傲慢であった」と述べている。フィレンツェの中産階級や下層階級の住民は、都市の治安を乱す豪族に対してこうしたイメージを抱いていた。マキアヴェッリ著、齊藤寛海訳『フィレンツェ史（上）』、岩波文庫、2012年、250頁。
- (31) A. Bicchi e A. Ciandella, *op. cit.*, 1999, p.32.
- (32) A. Benvenuti, *op. cit.*, 1988, pp. 136-137.
- (33) 円柱の銘文については、S. J. Cornelison, *When an Image is a Relic: The St. Zenobius Panel from Florence Cathedral*, in *Images, Relics and Devotional Practices in Medieval and Renaissance Italy*, eds. By S. J. Cornelison & S. B. Montgomery, Arizona 2006, p. 98, n. 7を参照のこと。
- (34) A. Benvenuti, *op. cit.*, 1988, p. 143.
- (35) M.C.ミラーは、1286年から記録が残り1584年に廃止された、フィレンツェ司教の入市式の儀式的内容という観点から、フィレンツェにおける聖ゼノビウスの役割を詳細に分析している。M.C. Miller, *The Florentine Bishop’s Ritual Entry and the Origins of the Medieval Episcopal “ADVENTUS”*, in “Revue d’histoire ecclésiastique”, 96(2002), pp. 5-28; id., *Why the Bishop of Florence Had to Get Married*, in “Speculum”, 81(2006),

pp. 1055-91; id., *Urban Space, Sacred Topography and the Ritual Meanings in Florence: The Route of the Bishop's Entry, c. 1200-1600*, in *The Bishop Re-Formed: Studies in Episcopal Power and Culture in the Central Middle Ages*, eds. J.S. Ott & A.E. Trunbore, 2007, pp. 237-249.

(36) M.C. Miller, *op. cit.*, 2002, p. 17.

(37) M.C. Miller, *op. cit.*, 2006, p. 1077.

(38) *Ibid.*, p. 1078.

(39) M.C. Miller, *op. cit.*, 2002, p. 8.

(40) *Ibid.*, pp. 80-81.

(41) マントヴァ公国の宮殿の一部として使用されていたマントヴァのサン・ジョルジョ城の、マンテーニャが1465～74年に装飾をした「夫婦の間」の天井には、ゴンザーガ家の統治権がローマ皇帝に由来することを主張する目的でカエサルやアウグストゥスの胸像が描かれている。

(42) 同礼拝堂の装飾と参考文献については、金原由紀子、前掲書、2005年、pp. 195-220.

(43) 註4のA. Vauchez, *op. cit.*, 1989.を参照。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「イタリアにおける共和制都市国家の美術に関する包括的研究」研究代表者：金原由紀子、平成21年度～24年度、課題番号21520108の交付を受けて行なった研究成果の一部である。



【図1】タッデオ・ディ・バルトロ、《聖ジミニアヌス祭壇画》(部分)、1390～1400年頃、市立美術館、サン・ジミナーノ



【図2】ドメニコ・ギランダイオ、《玉座の聖ゼノピウスと助祭》、1482～84年、ユリの間、パラッツォ・ヴェッキオ、フィレンツェ



【図3】聖ゼノピウスの円柱、サン・ジョヴァンニ広場、フィレンツェ



【図4】ミリオレ・ディ・ニコロ・スプロナイオ、楡の葉の装飾(聖ゼノピウスの円柱)、1375年、サン・ジョヴァンニ広場、フィレンツェ



【図5】アンドレア・アルディーティ、《聖ゼノピウスの胸像型聖遺物容器》、1333年、サン・ザノービ礼拝堂、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



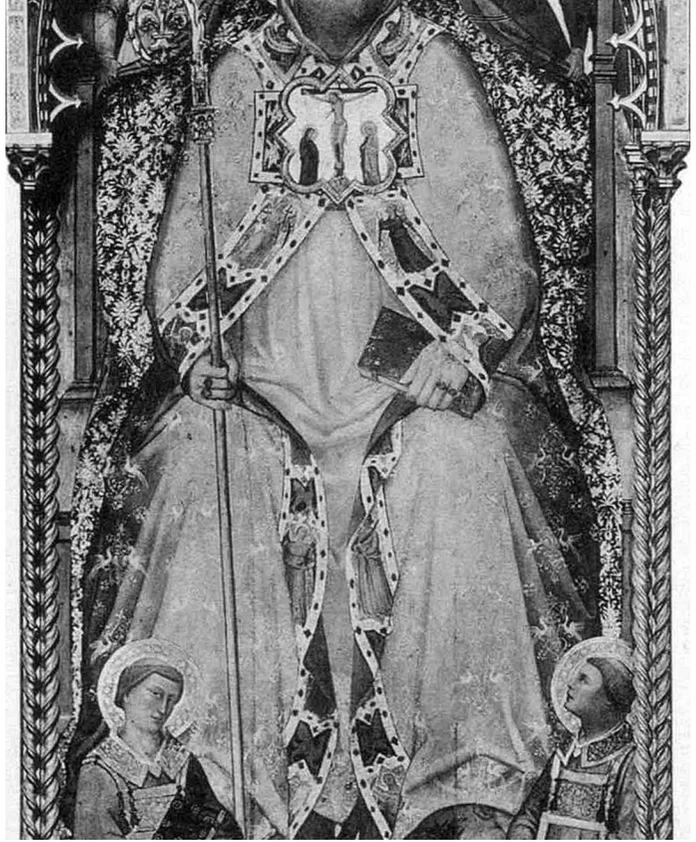
【図6】ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《玉座の福音書記者ヨハネ》、1375年頃、アカデミア美術館、フィレンツェ



【図7】ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《玉座の福音書記者ヨハネ》(部分)、1375年頃、アカデミア美術館、フィレンツェ



【図8】ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《玉座の聖ゼノピウス》、1480年頃、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



【図9】ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《玉座の聖ゼノピウス》(部分)、1480年頃、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



【図10】ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《玉座の聖ゼノピウス》(部分)、1480年頃、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



【図11】ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《玉座の聖ゼノピウス》(部分)、1480年頃、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



【図12】ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《玉座の聖ゼノピウス》(部分)、1480年頃、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



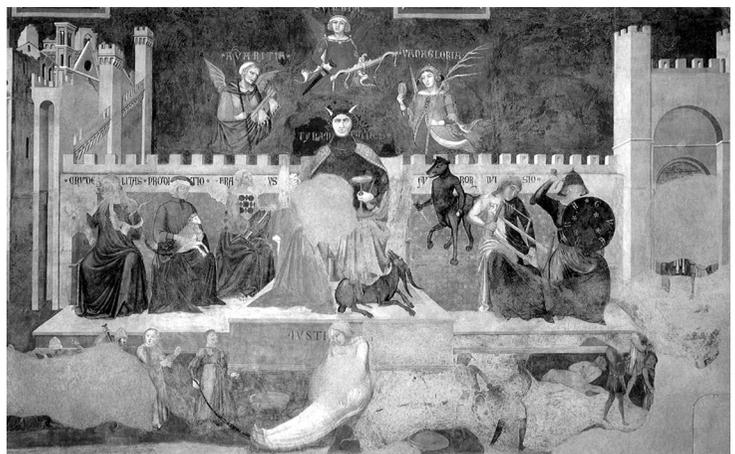
【図13】 ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《ガリア人女性巡礼者の息子の蘇生》（《玉座の聖ゼノピウス》のプレデッラ）、1480年頃、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



【図14】 ジョヴァンニ・デル・ピオンド、《楡の木の奇蹟》（《玉座の聖ゼノピウス》のプレデッラ）、1480年頃、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂、フィレンツェ



【図15】 アンブロジー・ロレンツェッティ、《善政の寓意》、1338～40年、ノーヴェの間、バラツォ・プブリコ、シエナ



【図16】 アンブロジー・ロレンツェッティ、《悪政の寓意》、1338～40年、ノーヴェの間、バラツォ・プブリコ、シエナ